

令和3年度自己評価計画書

						石川県立七尾高等学校	
重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
1 豊かな人間性と国際性の育成							
<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 ・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」(随時) 	生徒会各学年	部活動単位でボランティア活動に取り組んでいるが、必ずしも自発的なものとはいえない状況が見られる。生徒が自主的にボランティアを実行できるよう、そうした機会や情報を適切に提供することが課題である。	<p>【成果指標】 (生徒)</p> 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査(7、12月)
<ul style="list-style-type: none"> ・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「能登の里山里海」特別講座(1年) ・ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業(2年) 	NSH各学年	昨年度、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できた生徒の割合が80.3%であった。	<p>【成果指標】 (生徒)</p> 「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。	4月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査(7、12月)
	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化交流 ・外務省高校生講座 	NSH各学年	昨年度、文化について理解を深め、さらに学びたいと感じた生徒の割合が83.2%であった。	<p>【成果指標】 (生徒)</p> 「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。	4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査(7、12月)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
2 進路志望実現のための学力の形成							
<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。 生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 志を貫くためのキャリア教育 キャリア教育講演会 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 進路情報の発信 進路講演会 難関大学入試問題解法研究 金沢大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学キャンパスビジット等 京大サマースクール 金沢大学による出張講座 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望理由書の作成（1・2年） 批判的思考力育成（3年） 放課後の学習会 出願校検討会（3年） 	進路指導課 各学年	ワンランク上の進路志望を持ち、自己研鑽に励む生徒が多いが、それを下支えする志望理由を説明できない生徒が多い。	【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満	各学年目標 1年100（5割） 2年140（7割） 3年190（8割） Cの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査（7、12月）
		1 学年 進路指導課	定時・定量型家庭学習の確立を目標に、毎日の学習記録をチェックすることにより、学習を中心とした生活習慣の確立を図っている。	【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。	（進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満	Cの場合は改善策を検討する。	模試結果分析
				【成果指標】 （生徒） 着実な学力形成を果たしている。 （進研模試1月）	1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満		
		2 学年 進路指導課	3教科を中心に予習、復習プリント等を使って家庭学習の充実を図り、習熟度別授業や課題の差異化など個に応じた指導を通して学力の向上を図っている。	【成果指標】 （生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較）	2年次に、学力を伸ばした生徒が A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満	Cの場合は改善策を検討する。	模試結果分析
				【成果指標】 （生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試1月）	1月進研模試3教科総合で学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満		

				<p>【成果指標】 (生徒) 着実に学力を伸ばしている。 (進研模試1月)</p>	<p>1月進研模試での5教科総合偏差値で60以上の生徒が</p> <p>A 80人以上 B 60人以上 C 60人未満</p>		
		3学年 進路指導課	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習時間を確保させつつ、自主的、自律的な学習姿勢を確立し、より質の高い学習を促す。 習熟度別学習指導を進め、下位層に対しては年間を通して補習等により学習を支援し、上位層については個別添削等を継続的に実施する。 共通テスト対策、大学入試制度や入試問題の研究を通して、教科指導力向上を図る。入試情報の共有を図り、担任の進路指導力を向上させる。 	<p>【成果指標】 (生徒) 個々の志望大学の結果による。</p> <p>*スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p> <hr/> <p>難関大学10大学の合格者数が</p> <p>A 25人以上 B 20人以上 C 20人未満</p> <hr/> <p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 40人以上 B 30人以上 C 30人未満</p> <hr/> <p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 160人以上 B 140人以上 C 140人未満</p>	Cの場合は改善策を検討する。	大学入試結果

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
3 教員の総合的な指導力の育成							
<ul style="list-style-type: none"> 生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。 教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理能力などの実践的な指導力の向上に努める。 校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。 GIGA スクール構想の実現に向けて、教員のICT活用指導力を高めることによって生徒の 	<ul style="list-style-type: none"> スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付 生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施 	生徒課	スマートフォン・携帯電話等によるインターネットトラブルについて、教員が理解を深め、生徒への予防的指導を行っていることが、トラブル防止につながっている。今年度もこうした取組を継続する。	【成果指標】 (生徒) スマートフォン等によるインターネットに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査(7、12月)
	<ul style="list-style-type: none"> 「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示 Classiを活用した予習内容の可視化 予習チェックの呼びかけ 「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有 批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫 	教務課	昨年度は国語42.6%、数学49.1%、英語57.8%であり、一昨年度から全体的に低下傾向が見られる。 昨年度「多様な見方考え方が身につく」と答えた生徒の割合は60.0%であった。	【成果指標】 (生徒) 国語・数学・英語において「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まっている。	国語・数学・英語における「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が A 70%以上 B 65%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合は改善策を検討する	生徒対象調査(7、12月)
	<ul style="list-style-type: none"> 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まっている。 			【成果指標】 (生徒) 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まっている。	「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が A 65%以上 B 60%以上 C 55%以上 D 55%未満	C、Dの場合は改善策を検討する	生徒対象調査(7、12月)
	学年・教科を主体としたOJTによる若手教員育成を推進する。	総務課	教員経験が10年未満の若手教員は、全体の43.8%を占めている。そのうち3年未満の教員は全体の12.7%であり、昨年度より高くなっている。	【成果指標】 (若手教員) OJTをとおして教員としての成長を実感できる。	OJTにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、 A 100% B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	教員対象調査(7、12月)

<p>学びの変容を促す。</p>	<p>学校を挙げてGIGAスクール構想を推進する。</p>	<p>総務課</p>	<p>授業におけるICT機器の活用は全校的に普及しているものの、学習動画の作成など、生徒の主体的で深い学びを促す取り組みは途上段階である。</p>	<p>【成果指標】 (教員) ICTを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。</p>	<p>アンケートで、「ICTを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、</p> <p>A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満</p>	<p>C、Dの場合は改善策を検討する。</p>	<p>教員対象調査(7、12月)</p>
------------------	-------------------------------	------------	---	---	---	-------------------------	----------------------

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
4 魅力ある学校づくり							
<p>・特色ある教育活動（第4期SSH事業、NSH事業）を全校的に推進し、その成果の全国的な普及に努める。また、その活動・成果を地域の小中学生に広報し、本校の魅力として伝える。</p>	<p>・学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及</p>	SSH NSH	SSH第5期の申請に向け、これまでの成果の発信と普及が求められている。	<p>【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。</p>	<p>本校の開発教材を使用した学校数が</p> <p>A 20校以上 B 15校以上 C 10校以上 D 10校未満</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	聞き取り調査を行い、過去の実績も含めて評価する。
	<p>・物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成</p>	SSH	<p>・昨年度は「高校生バイオサミット文部科学大臣賞」をはじめ、7件の発表で入賞した。</p> <p>・令和3年度に開催される全国総文への出場件を2件獲得し、また金大GSC（グローバルサイエンスキャンパス）第2ステージに、4名が進んでいる。</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	大会結果
	<p>・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進</p> <p>・複数年を見通した指導の構築</p>	NSH	<p>昨年度は、左記コンテストへの入賞が4件あった。中でもWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）・SGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）探究甲子園といった全国大会規模の発表会にも1件選出された。</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 優勝を含む入賞6件以上 B 入賞 5件 C 入賞 4件 D 入賞 3件以下</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	大会結果
	<p>・文系フロンティアコースに所属する生徒の実用英語技能検定2級以上における取得率の増加</p>	NSH	<p>昨年度11H、21Hで左記検定を取得した生徒は31人であった。</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 左記の検定合格者数が増加している。</p>	<p>左記検定における合格者数が</p> <p>A 40人以上 B 36人以上 C 34人以上 D 33人以下</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	検定結果

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
5 働き方改革の推進							
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・月2回の定時退校日と8月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に1回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。 	管理職	<p>一月あたりの時間外勤務時間の平均が、前年の60.4時間から42.2時間に減少した。</p>	<p>【成果指標】 (教員) 業務の工夫・改善により効率化を図る。</p>	<p>業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>C、Dの場合は改善策を検討する。</p>	<p>教員対象調査(7、12月)</p>